

「いや、そりやさうさせて下さるのが當然ですよ。差出がましいが、その役は私が買つて出ます。は、は、は、。いづれ二三日中に、伯爵の方の御都合を伺つて、二人で一度お邪魔に出ることにはませう。そりや平民的な、捌けた方ですから、きつとお喜びになるだらうと思ふんです。」と、云つて、尤もらしく首を振りながら、「横川さん、こんなことを私の口から云つちや失禮に當るかも知れないが、併しどうか不悪聞いて下さい。貴女は今度のことではあの白峯先生にも一方ならぬお世話になつたんですから、そりやあの人と近しくするのは決して不思議はないですが、併しあの白峯先生はあの通り兎角の評判のある人ですから、その點だけは何うか充分考への中へ入れて置く必要があると思ふのです。貴女のやうなしつかりした人のことですから、まさかのことはあるまいと思ふですけれど、世間の口といふものは煩いのですからなあ。此間のやうに新聞になんか出たりすると、全く困るですよ。貴女は今が一番大事な時なんですから、畫家仲間と浮名を立てられたりするやうなことは出来るだけ避けなけりやならんですからなあ。」と、親切にいふ。

京子もそれを云はれると、少し恥かしさうな面色になつて、

「あの、私もほんとにあれには困つてしまひましたわ。同じ協會の中でそんなことが御座いますと、ほんとに煩う御座いましたねえ。そりや白峯さんだつて、して奥様もあるんで御座いますから、私のやうなものを今更どうのかうのつていふことも御座いますまいけれど、噂を立てられるだけでも、私ほんとに困つてしまふんで御座いますわ。」と、云つて、眉を擧める。

笹山は不思議な笑ひ方をして、

「いや、全く世の中は煩いですよ、皆が皆色眼鏡をかけて、人のあらばかり捜しあつてゐるんですからなあ。貴女のやうに綺麗で、しかも人氣者になると、これからは一層煩くなるですよ。は、は、は、。」

京子は嬌態をして、

「まあ、御笑談ばかり。」と、云つて、艶めかしく笑ひながら、「私のやうな日蔭ものはもう

このまゝにして置いて下さるのが一番いゝんですわ。たゞ畫絹のうへの私だけみて下されば、それでいゝんですもの。」と、そつと膝のうへで小娘のやうに袂ばかり弄んでゐる。

笹山はその美しい姿をうつとりと見入りながら、

「いや、世の中の人はさうはさせんですよ。これから何か機會がある度にどうかして貴女を人氣の矢面に立たせて、問題にしようとか、るに極つてゐます。従つて此れからは餘程注意してゐないと、誘惑の手がさかんに迫つて來ますよ。あなたほどの人ですもの、うつちやつて置くもんですか。はゝゝゝ。」と、云つて、彼は極めて唐突に、「ねえ、横川さん。貴女は結婚といふことに就いては何ういふ考へをお持ちですか？」と、訊く。

京子は顔をあけて、

「私ですか。私、そんなことは、ほんとうのところ少しも考へてゐませんわ。私の一生はもう畫筆ひとつに捧けてゐるんですもの。」と、云ひかけてゐると、そこへ俄かに階段の方から、とたばたと人の足音がして、誰れか客が上つて來た。と、みると、階段のところからは先づ

ふてふて肥つた女給が笑ひながら上つて來て、その腰にすがるやうに一人の背廣を着た若い男が上つて來た。

「おい、お安さん。今夜も僕あ金がないんだぜ。君、承はるか。はゝゝゝ。」なぞとその男は酔つてゐるらしい口振りでいひながら上つて來たが、ふつと笹山達の方を覗くと、突如頓狂な聲で、

「やあ、笹山さん。横川さんも御同列ですか。恐れ入りましたなあ。はゝゝゝ。」と、云ひながら、此方へ入つて來る。

笹山も京子も悸乎としてそつちをみた。よくみるとそれは思ひもかけないあの黒田夢人であつた。二人は二度吃驚して少時は呆氣にとられてゐた。

黒田はそのまゝつかつか二人の卓の傍へやつて來て、いきなりそこの椅子へがくりと坐りながら舌なめすりをして、

「笹山さん、貴方はこんな遠方まで出張つて横川さんとランデブウをやつてゐるんですか。」

は、は、は、。そんなに臆病にならないでもいい、でせう。もつと天下晴れて公然とおやんなさい。は、は、は、。』と、嘲けるやうに云つて、『全く悪いことは出来ませんなあ。僕は今日この根津に魔窟があるんで、それを探険にやつて来て、今歸りなんですよ。まさかこんな處で貴方に出會はさうとは思はなかつた。矢張り天は僕に材料を恵んで呉れるんですなあ。は、は、は、。併し全く思ひがけないところで逢ひましたなあ。』と、唾をとばしながらいふ。

笹山は酒も何も一度に醒めてしまつたやうな興覺めた顔をして、黙つてゐた。
女給は馴染みとみえて、馴々しい態度で、

「ねえ、黒田さん、此方へ被來いよ。此方の方がお合客がなくてようござんすわ。』と、いふ。
黒田は手を振つて、

「おい、お安さん、僕はとんでもない人に會つちやつたんだ。この方達はかうみえても、こんな店には惜しいお客様だぜ。この淑女が目下繪畫協會の花形として人氣を一身に集めてゐる閨秀畫家横川京子さ。この紳士が出版界の大資本家啓文社の主幹笹山雄造さ。今や映寫い
たしましたる場面はこの二人の大立物が、貧しい根津のほとりの精新軒の二階で、果敢ない
ランデブウを楽しんでゐる最も情緒纏綿な光景で御座います。は、は、は、。』と、悪巫山戯
をして、

「おい、お安さん、さあ、金主がついた。ウキスキイでもジンでも何んでもい、何んでも
高い酒をうんともつておいで。は、は、は、。』と、埒もなく噓したてる。

京子はもう穴へでも入り度いやうに、顔を背けてゐた。

女給もさすがに呆れて、ぼんやり突立つてじろじろ二人の方をみてるた。

三十三

笹山はさうした黒田の侮辱に耐へられなくなつたとみえていきなり氣色ばみながら、

「おい、黒田君、巫山戯た眞似をするのもい、加減にしたらよからう。黙つてみてゐればい

い氣になつて、このうへ馬鹿なことを云ふと承知せんぞ。」と、威嚇する。

黒田はせゝら笑つて、

「はゝゝゝゝ。笹山さん。今夜はあなた馬鹿に凄むぢやありませんか。横川さんの前だつて何もさう豪さうなことを云はなくてもいゝでせう。あなたは厭に人を甘がつて、高飛車に出るが、今度のことぢやさすがの貴方も參つたでせう。僕だつてこれでやらせれば、一寸仕事らしい仕事はしますからね。そんなに大きな顔をする、又書きませぬ。」

笹山は眼を据ゑて、

「なに？ 詰らん強がりやを云ふもんぢやないよ。君の方ぢやあんなことを書いて、鬼の首でも取つたやうな氣で居るか知らんが、私は何等の痛痒も感じないのだ。どうせあんな東京新聞のやうなゴロツキ新聞で何を書かうと、世間ぢや取上げもせんからね。おい、黒田君、もつと廣い世間をみろよ。裏長屋のやうな小新聞社の編輯室からみれば、世間はそれぐらゐにしきやみえまいが、君のやうな人間のことを昔の熟字で井底の痴蛙といふのはゝゝゝ。」

黒田も氣負ひ立つて、

「井底の痴蛙はいゝね。仰有ることが古風でよく出来てる。横川さん、あなたもまあそんなに厭々をしないで、せめてお美しいお顔でも拜ませて下さい。此頃は又大層な御人氣で、お羨ましいことです。女といふものは節操を提供すりや貴女のやうに一舉にして人氣ものになれるんでさあ。おい、お安さん。君もこゝへ来て、又媚びの安賣りでもしろよ。この笹山さんは色魔だからちつとお世話になつたら何うだい。おい、それよりも酒を早く持つて来い。」

彼は何をいふのだからで辻褄が合はなかつた。

笹山も漸次と氣が靜まつて来ると、こんなものにいざこざ云つても初まらないと思つた。で何よりも遁けるのが一番だと思つて、彼は黒田が何を云つても態と平氣な顔で酒を飲んで、悠然とした態度でやがて勘定を命じた。

黒田はそれをみると、蛇のやうな眼つきをして、

「はゝあ、もうお歸りですか。もう少しいゝでせう。敵に後をみせて歸るのは卑怯ですぜ。」

と、云つて、ぐるりと此方へ向き直りながら、「笹山さん、實は此間から一度啓文社へ出てお願ひしようと思つてゐたんですが、此處でお眼にかゝれたのが何よりです。もう口数はきませんから、何うか僕に金を下さい。ほんとうなら先づ二三百圓吹ッかけるところだがまあ今夜は三十圓ばかりで勘辨して置ませう。僕はこれから下谷へかへつて不見轉を買ふんだから、その經費を出して下さい。」と、臆面もなくいふ。

笹山は冷然とした態度で、

「は、は、。君にやる金があるんなら犬にでも呉れるよ。」と、云つて、京子に眼配せして立ちながら、「まあ、顔でも洗つて出直ささ。」と、取合ひもしない。

黒田はさう云はれると、すつくと立つて、笹山の前へ立塞がりながら、

「何んですと？ 犬にやる？ 大きなことを云ふのはよして貰ひませう。そんな氣の利いた

臺白を云つても役者が大根ぢや引立ちませんぜ。まあ、そんなことを云はずに金を下さい、

その方がお爲めになりますぜ。」

笹山はその顔を眞面にきつと見据ゑて、少時の間黙つてゐたが、やがて物凄くにたりと笑つて、

「おい、黒田、貴様は何うしようといふんだ？ 金を呉れなけりや俺を何うする料簡なんだ

？」と、まるで調子をかへながらいふ。

黒田はその様子で聊か氣を呑まれたらしく、思はず一歩退つて、

「何うするも、かうするもありませんや。今夜の一場を原稿にして明後日の紙上へ出す迄で

さあ。」と、いふ。

笹山は白眼をむいて、いつもとは似てもつかない凄味な顔をしながら、

「おい、生嚼りな青二才の癖に、變な眞似をすると今度こそ承知せんぞ。俺を誰れだと思つ

とるんだ。貴様は知るまいがもう俺の方ぢや、ちやんとその筋へ手を廻して、明日にも東京

新報を相手にとつて、片端から引上げてやる準備は出来て居るんだぞ。貴様の今云つたこと

はい、手證だ。さ、愚圖愚圖云ふんなら、警察へ來い。さもなけりやこゝへ警官を呼んで裁

きをつけるから、そこを動かすな。黙つてゐりやつけ上つて、何處まで無禮なことを云ふんだ。貴様なんぞの舌の先で強請られるやうな笹山雄造ぢやないぞ。さ、文句があるんならいくらでも云へ。一々告訴状へ書き上げて、悪徳記者を懲らしめてやるから、さ、何んとでも云へ。さ、云はんか。」と、激しい權幕で詰め寄つて、いきなり太い手で黒田の上衣をつかんでこぶき上げる。

黒田は笹山が意外な強さをみせて來たので、一寸返事につまつて眼ばかりばちくりさせてゐたが、笹山はそれでもじいつとその顔を睨めつけて少時の間、満身に力をこめたまゝいざと云は、忽ち打つて蒐りもしかねまじい氣配をみせてゐた。そのあとで笹は黒田が恐入つたのを見澄まして、やつと手を放して、

「さ、横川さん、行きませう。」と、云つて、それなり悠々と階段を下りていつた。京子も溜けるやうにその後を追つていつた。

黒田はそのあとを見送つて、まるで氣でも狂つた人間のやうに、

「は、は、は、は、は」と、意味もなく大聲をたて、笑つたが、併しそれは虚勢に過ぎなかつた。笹山は戶外へ出ると、すぐにいつもの態度に歸つて、笑ひながら、

「横川さん。何うもほんとに仕様がないうに逢つちまひましたなあ。實は煩いからちつとばかり金でも呉れて突放さうかと思つたんですが、そんなことをすると、あとで又煩いと思つて、一寸威嚇しを食はせてやつたんですよ。は、は、は、は。とんだ芝居でしたなあ。」と、笑ふ。京子はまだ興奮が靜まらないやうに、

「ほんとに私、一時は何うしようかと思ひましたけど、ほんとにいゝ氣味でしたわ。私胸がすうつと致しましたわ。」と、さも痛快さうにいふ。

笹山は頭をかいて、

「は、は、は、は、いや、いや、年をして、どうも飛んだところをお眼にかけて、お恥かしいですよ。だがいつも云ふとほり、もう、少しもあんなものを恐がることはないです。今も御覽の通りあんな意氣地のない男なんですからなあ。一寸啖呵をきると、すぐにあの通りふるふる

慄へてしまふんですもの。は、は、は。どうせ歯牙にかけられるほどの奴ぢやありませんよ。」と云つて、

「併し、あんな奴のことですから、又何か新聞にかくに極つてゐますよ。つまり犬の糞で仇をとる形ですからなあ。ほんとに實に煩いですよ。私は何を書かれても構はんが、全く貴女にはお氣の毒でならんのです。私のやうな詰まらん人間と假にも浮名を立てられるだけでも貴女の人氣に傷が付きまます。それだけは私も申譯がないと思つてゐますから、他日何とかするつもりではゐますが、何うかまあ今のところは許して下さい。」と、やさしい調子でいふ。

京子は却つて身につまされて、

「い、え、もう何うかそんなことは御心配なさらしないで下さいまし。何うせ知つてゐる人は知つてゐるんで御座いますもの。私こそ貴方に申譯が御座いませぬわ。」と、云つて、媚びるやうに、「ねえ、貴方、どうか此の後もしあの黒田さんが何か致しますやうでしたら、何處までも私の味方になつて頂き度う御座いますわ。私、かうなつてみますと、貴方お一人が頼

りなんで御座いますもの。何も彼も知つてゐて下さるのは貴方ばかりなんで御座いますから、私、ほんとに貴方を父とも兄とも思つて、お縫り申して居りますんですわ。」と、いふ。

彼女は色戀などといふものから全然離れて、今では心の底から笹山に信頼しきつてゐるのであつた。眞實、或時は父とも思ひ、又或時はそれ以上に笹山に頼つてゐるのであつた。

二人は間もなく本郷通りへ出て來てしまつた。笹山はやさしい言葉でいろいろと京子を慰めたり、勵ましたりしながら、到頭京子の寄寓してゐる池島の家まで送つて來て呉れたのであつた。

その晩京子は寢てからも、笹山の頼もしい言葉を一々心に思ひ出したりした。

三十四

繪畫協會の展覽會も、非常な好人氣のうちに毎日毎日溢れるほどの観客を呼んで、日曜

日なぞはもう三度も四度も丸場を閉ざして、場内の整理をしなければならぬやうな賑はひを呈してゐた。中でも京子の「元祿の夢」は日を経るに従つて評判が高くなつて、會場で賣る繪葉書の賣高なぞも群を抜いてゐた。殊に若い男女の観客は誰れも彼もその濃艶な色彩の美に眩惑されて、その陳列してある室はいついつて見ても芋を洗ふやうに混雜してゐるのであつた。

そのうちに會期も漸々末に近くなつて、もうあと四五日で閉會しようといふ或日のこと、京子は突然、白峯秀邦の訪問を受けた。彼女はその日は一日池島の家へ二階へ引籠つて、例のやうに啓文社の仕事をしてゐた。彼女も自分の評判が高くなるにつれ、そんな端仕事には身を入れる氣になれなかつたが、併し笹山に恩顧があるので、彼女は啓文社の仕事にだけは相當の努力を費してゐた。丁度もうあと三枚ほど書けば終になるので、彼女は暮れてゆく日の色をみてはせつせと繪筆を運ばせてゐたが、そこへ突然階下から池島の細君の琴子が顔を出して、かういふ方がおみえになつたといつて、白峯の名刺を出した。

その後は白峯にも逢はないので、京子は自分の無沙汰をひどく氣に咎めてゐたところとて、慌て、そこいらを取片付けて、先づ彼を二階に招じた。

白峯はその日は濫いお召しの着物に對の羽織を着て、緞れの角帯をきちんとしめて、まるで役者のやうな粹な姿をしてゐた。彼は二階へ上つて來ると、もう片頬にやさしい笑みを含んで、

「やあ、相變らず御勉強ですなあ。」と、愛想のいい調子でいつて、「どうも懸け違つて、長いことお眼にかゝりませんでしたなあ。私も會の方のことで忙がしかつたもんですから心では思ひながらも、つひ御無沙汰をしてしまひまして。」と、云ひながら、京子が出す座蒲團へのつたりと坐る。

京子は此方が云はうと思つてゐることを先に云はれてしまつたので、挨拶に困つて、丁寧に辭儀ばかりしながら、

「私の方からこそ。」と、つゝ、まじやかな言葉を返して、「私も一度是非お禮券々お宅へお邪魔

に出ようと思ひながら、やつぱり何彼とごたごた致して居りますもんで御座いますから、失禮ばかり致して居りまして、何とも申譯も御座いません。』と、いふ。

白峯はにつこりして、

『いや、お言葉で恐入ります。』と、云つて、そつと机のうへを覗きながら、「さぞお忙がしいでせう。それは何んです？」と、訊く。

京子は氣恥かしさうに嬌態をして、態と仕かけた仕事を自分の腕で隠すやうにしながら、「いゝえ、これは何んでも御座いませんの。こんなものを御覽になつちや困りますわ。ほゝゝゝ。』と、笑ふ。

白峯はそれでもそつちをみて、

『貴女は相變らずそんな仕事をなすつてゐるんですか、もういゝぢやありませんか。今度のやうな成功を得られた貴女が、そんな駒繪なんかやたらお描きになるのは不利益ですよ。』といふ。

京子はもう一度恥かしさうな顔になつて、

『でも私、これは啓文社のものだもんで御座いますから、以前からの行懸り上、さう急にやめる譯にもまゐりませんで。それに私やつぱり生活の爲めにはこんなものも少しはやりませんけりやなりませんので。』と、云つて、こそこそ自分で茶を入れる。

白峯はその顔をうつとり見ながら、

『いや、いかに生活の爲めにもせよ、今更、こんなつまらないものを描くのは、自分で自分の名譽に傷をつけるやうなものですよ。私は賛成しませんなあ。生活の爲めなら生活の爲めで、もつと何かいゝ方法がいくらもありさうなものぢやありませんか。』と、云つて、ひと膝進み出ながら、「實は今日私がかうやつてお伺ひしたのも、それに關聯したことなんで、實は甚だお話しし憎いですが、又貴女にひとつ御迷惑なことをお願いしようと思つて居るのですよ。それは他でもありませんが、私の處へ始終出入りして居る書畫屋で、倉橋といふものが居るのです。それが今度の貴女の「元祿の夢」に悉く傾倒してしまつて、何うしても私を通し

て何か描いて頂いて貰つてくれと云つて、承知しないのです。で、私も倉橋なら間違のない男ですし、繪畫協會とも深い縁故があるので、貴女に御紹介をしても少しも差支へないと思つて、實は貴女には失禮ですが、専断で引受けてしまつたのですよ。」と、云ふ。

京子はそれを聞くと、嬉れしさうに笑つて、

『まあ、何うもいろいろ又お心にお懸け下さいまして、ほんとうに有難う御座いますわ。私も實は皆様に御相談をいたしまして、さういつた方面の仕事も少しづつさせて頂かうと存じて居りましたところで御座いますわ。ほんとに有難う御座います。』と、いふ。

白峯はそれを皆迄は云はせず、懐中から分厚な青い色の封筒を取り出して、それを京子の傍へ置きながら、

『それで實は甚だ何んですが、倉橋が金を置いていきましたもんですから、私も兎に角受取つて置きましたんです。これは五百圓ありますさうで、まあ、手付けといひませうか、名儀は何んでもようござんすから、兎に角おをさめなすつて置いて下さい。』と、いふ。

京子は稍面喰つて、

『まあ、……』と、云つて、その封筒をちらりとみたが、やがて困つたやうに、『あの、私なんなものを頂いてよろしいんで御座いませうか。それぢや却つて困つてしまひますわ。』と、いふ。

白峯は笑つて、

『いや、こんなものは幾ら貰つたつて構はんですよ。それが我々の社會の習慣ですもの。もし五百圓で足りなければ、千圓でも千五百圓でも持つて來させます。書畫屋なんていふものはいづれもさうしたもので、これで又自分の方は自分の方で莫大に儲けるんですからなあ。は、は、は、は。』と、笑ふ。

京子はさうは云ひながらもこんな金を黙つて取つてい、か何うか、心の底で惑はずにはゐられなかつた。もうそろそろ時候も寒冷に向つて來たので、冬物の着物なども欲しい昨今である。この三分の一もあれば、貧乏時代に質に入れたものなぞも受けられるし、それに新ら

しいものも二三枚は出来るので、この金が自分の手へ入ればそれこそ嬉しいのであつたが、併し今迄にさうした経験のない彼女は、何んだか恐いやうな臆びれた心持ちがしてならないのであつた。

白峯は熱い茶を啜りながら、

「實際あなた、生活の爲めなら、かういふ仕事の方へ手をお懸けになる方がどれだけ利益であるか分らんですよ。詰まらん雑誌などの端仕事をしたつて、第一金嵩は上りませんし、それに世間からは安つぽく見られて、こんな馬鹿々々しいことはありませんよ。それよりもこれで倉橋の方なら半切の三本かそこいら描いてやれば、これ位の金は帳消しになつてしまふんですもの、誰かが考へたつてこんなうまいことはないぢやありませんか。」と、いつて、彼はじいつと京子の顔をみながら、「併し啓文社と貴女とは随分深い関係が、おありのやうですか。こんなことを云つて或は貴女のお氣を悪くするか知れませんが、もしさうでしたらどうか許して頂きます。それに笹山さんとは特別の御関係もおありのやうですから、私としては少し出過ぎた云ひ方かも知れませんが、……」と、云つて、彼はさも意味ありけにやりと笑つた。

三十五

京子はさう云はれると、思はず顔を上げて、

「あら、貴方、私、さういふ意味で申上げたんぢや御座いませんわ。そんな風にお解り下さつちや私、困つてしまひますわ。」と、いふ。

白峯はそれでも異様な微笑を唇の邊に漂はしながら、

「いや、何もそんなに辯解なさらなくつてもいいですよ。私はいろいろ聞き込んでゐることもありますから……」と、云つて、京子の顔を眞面にみながら、「それにしても、東京新報は中々悪辣にやるぢやありませんか。貴女もとんだものに見込まれましたなあ。一昨日のなぞ

は随分激しく素破ぬいてありましたなあ。」と、いふ。

京子はふつと顔色をかへて、

「まあ、又何か書いて御座いましたか？ 私新聞が手に入りませんもんですから、あの後ちつとも読みませんのですけれど……」と、いふのを白峯は引取つて、

「ぢや貴女は御存知ないんですか？ は、ハ、ハ、ハ、ハ。香氣なもんですなあ、もう協會の事務室ぢや昨日なんかその噂で大變でしたよ。あれをお読みにならんとは驚きましたなあ。併し尤もあんなものを御覽になつちや、どうもさうやつて落着いてゐられる譯のもんぢやありませんからなあ。は、ハ、ハ、ハ、ハ。」

京子もさう云はれると急に心配になりだして、

「まあ、そんなに書いて御座いましたの。ほんとに困つてしまひますわねえ。どんなことが書いて御座いましたか？」

「どんなことつて、貴女、一寸貴女の前ぢや云ひ憎いですが、あの笹山さんと貴女のことですよ。何んでも根津の精新軒とかいふ西洋料理屋の二階で、貴女がつまり笹山さんと逢曳をしてゐられるところが三日續きで出てゐたんです。随分思ひ切つて書いてありましたよ。」

「あら、まあ、それでは……」と、云つたが、京子はさすがに稍どきまぎして、つひ辯解するやうな口調になつて、その晩のことを白峯にすつかり話しながら、「ほんとに困つてしまひますのねえ。私も書きやしまいかと思つて、心配はしてゐましたんで御座いますけれど、まさかそんなことまで……」

白峯は笑つて、

「いや、それが並大抵な書き方ぢやないんですよ。あなたが笹山さんの肩へしなだれか、つて、甘えてゐる様子が見るやうに書いてあるんです。皆でそれを讀んで、實は呆れて居つたんです。は、ハ、ハ、ハ、ハ。」

京子は眞紅な顔になつて、

「あら、随分な。ほんとに私、どうしたらよろしう御座いませう。」と、いつて、顔を伏せて

しまふ。

白峯は擲擲ふやうな調子になつて、

『併し兎に角お娛しみなことですなあ。私達は全く羨望に耐へんですよ。私達も一度は槍玉にあけられました。それと違つて笹山さんのは多少でも事實があるんだからいゝですよ。はゝゝゝゝ。』

京子はそんなことを云はれると一途に口惜しくなつて、

『あら、貴方までがそんなことを仰有つて、私困つてしまひますわ。貴方方でもあんな新聞の書くことをお信じ遊ばしませんですか。』と、むきになつていふ。

白峯は袂から煙草を取出して、火をつけながら、

『さ、そりや幾分誇張もあるでせうけれど、今のあなたのお話を伺つても、多少は信じない譯にはいかんですなあ。この噂はもう随分久しいんですし、それに第一あの笹山といふ人物が人物ですからなあ。はゝゝゝゝ。』

京子はさういはれてしまふともう返事のしやうがなかつた。今更になつてあの笹山がそんな人間でないことを説明するだけの勇氣もないので、彼女はもう何んとも云ふ人には云はせて置けといふやうな氣でゐた。

白峯は猶ほも言葉をつゞけて、

『併し、横川さん。これは私の老婆心からいふのですが、あゝいふ新聞の記事はあまり書かせないやうになすつた方がたしかに貴女にとつちや利益だと思ひますね。そりや蔭のことは何うあらうとまあそりや仕方がないとして、唯あゝいふことをあんまり公然と世間へ發表される、つまり一般の愛好者や憧憬者の感じを傷けることになりますからなあ。それは可成恐ろしいことだと思ひますよ。殊に今が賣出の時ですから、一寸したことでも意外な結果を生むやうなことがないとも限りませんからなあ。』

京子も合點いて、

『いゝえ、そりや私ももう疾うから心配致して居りますんで御座いますわ。それも何か少し

でも身に覚えのあることなら、私どうされても構ひませんけれど、でも私、ほんとは何のあとかたもないことなんで御座いますもの。馬鹿馬鹿しくつて、唯腹が立つばかりなんで御座いますの。それにもうあの新聞のことは笹山さんがすっかり引受けてるて下さるんですから、私も飽くまであの方に信頼して、何とか解決をつけて頂かうと思つてゐるんで御座いますわ。』

白峯はさういふ京子の顔をじろじろみて、

『併し横川さん。貴女は實際のところ、あの笹山さんをそれほどまでに信頼す可き男だと思つて被居るんですか？』と、突込むやうに訊く。

京子は合點いて、

『え、私、今迄長い間の御交際を振顧つてみましても、少しも世間の噂のやうなことは御座いませんし、そりや親切な、誠實ない、方だと確信して居ります。世間があの方を誤解して居るんで御座います。それにあ、いふ方ですから、敵も多う御座いませうし、そんな方達が

寄つてたかつて、下らない風説を立て、お歩きなさるんだらうと思ひまして、私もうそんなものは一つも取上げない氣で居りますの。私、何の理由もなく人を疑る位悪いことはないと存じますわ。』

白峯はふんといふやうな笑ひ方をして、

『いや、どうも馬鹿に貴女はあの人を信じ込んでしまつたもんですなあ。それならもう云ふ處はありませんよ。唯私はもう長い間あの人をしてゐることを見てゐるんで、何も彼も知つてゐるんです。ですから何んだかさうまでに貴女があの人を信じてゐるのが齒痒くて耐らんですよ。』と、云つて、眞顔になりながら、『ねえ、横川さん、貴女はもう五年ほど前に死んだあの平山榮子のことを御存知ですか？』と、いふ。

平山榮子といへばその時分の閨秀畫家として、非常な人氣を呼んでゐた女で、やつぱり京子と同じやうに濃艶な畫風で一世を風靡してゐたのであつた。年もまだ廿四で、肺を病つて空しく死んでいつたが、今でも彼女の技量と創意を追隨して、畫壇に彼女の畫風を残してゐ

る群少畫家は幾らもあるのであつた。

京子は何枚となくその人の作品もみてゐるので、それを思ひ出しながら、

「あの、私、よくは存じませんが、あの平山さんと、笹山さんとの間に何かそんな噂が残つてゐるんで御座いますか？」と、訊く。

白峯は煙草の煙をふかりふかり吐き出しながら、

「噂が残つてゐるどころやありませんよ。あの平山榮子は笹山の爲めに死んだとまで云はれて居るのです。……」と、云ひかけてゐると、その時、突然階段の下のところ、

「横川さん、お宅ですか？」と、いふ男の聲が聞えた。

京子は吃驚して、返事をしたが、それと一緒に階段をどしどし上つてくる足音が聞えて来た。

三十六

誰れかと思つて、京子は胸を躍らしてゐると、間もなく障子を開けて、

「やあ、……」と、云ひながら入つて来たのは、笹山であつた。彼はいつものやうに毛のもくもくした背廣を着て、片手に大きな革の折靴を挿んで、にこにこ笑ひながら入つて来た。

彼は先客が白峯であるのをみると、一寸變な顔をしたが、すぐに又にかやかな顔になつて、

「やあ、白峯先生、お珍しいところでお眼にかゝりますなあ。いつぞやはどうも大變に失禮いたしました。」と、云つて、そのまゝ態と京子の机の傍へいつて、どつかと肥つた體を落着けながら、「いや、どうも繪畫協會の展覽會はすばらしい景況で、さぞ皆さん鼻がお高いでせう。は、は、は、は。あれでは全く帝展も顔色なしですからなあ。ほんとうにいゝ鹽梅でした。」と、晴々したやうな調子でいふ。

白峯はたつた今まで當の笹山の悪口を云つてゐたので、さすがに氣が咎めるやうに、浮かぬ顔でそれに相槌を打つてゐた。

京子は思ひがけないところへ笹山が来て呉れたので、ひどく嬉びながら、茶をすゝめたり、それから後の消息を聞いたりした。

笹山も嬉しさに、一々しんみりな調子で受け答へをしてゐたが、やがてポケットを捜つて、三四枚の新聞を取り出して、京子の前へ置きながら、

「ねえ、横川さん。これを見て下さい。あの黒田の奴め頭書きましたよ。今度のは随分猛烈ですよ。は、は、は、は。」と、笑ふ。

京子はその新聞を取上げてひろげてみたが、それは例の東京新報で、その三面には先づ大きな二號の見出しで「閨秀畫家の戀」と書いてあるのが目についた。

京子は笹山の方をみて、

「貴方、私、今白峯様からこのことを伺つて大いに憤慨してゐましたところなんですわ。」と、

云つて、ずつとその記事を走り讀みにしてゐたが、やがてみるみる顔を眞紅にして、

「まあ、随分な、よくもこんな馬鹿なことが書けますわねえ。呆れてしまひますわねえ。」と、いつて、さすがにそのあとは讀めないやうに新聞を置いてしまふ。

笹山はその顔を見て、

「いや、随分ひどいことが書いてあるでせう。私も實は啓文社でこれを讀んで、もういよいよ我慢がしてゐられなくなつたんです。ですから實はちつと大人氣ないとは思ひましたけれど、私自身よりも貴女の方の利益を考へて、今朝社の辯護士にすつかり委任して、東京新報を相手にとつて、いよいよ訴訟を起こす手順にしたのですよ。それにかうなりやもうあの新聞を滅茶々に叩きつけてやり度いで、他の新聞の方へも私が自身で出懸けていつて、聲援を頼んで來たのです。ですから訴訟の方が成立すれば、それと同時に二三の勢力のある新聞が皆擧つて問題にする手筈になつてゐますから、もう大丈夫ですよ。此方がかうやつて綿密に運動をして置けば、もうちつとも恐れることはありませんから、貴女も安心してゐて下

「さい。」と、云つて、白峯の方を向いて、又につこりしながら、

「ほんとに仕様のない奴等ですなあ。かういふ奴等は今度こそ手酷くやつてやらんと日本の書壇の爲めにどれほど禍ひするか分りませんからなあ。」と、いふ。

白峯も微笑んで、

「さうですとも。」と、たつたひと言答へたが、何と思つたか急に歸り支度をして、「いや、横川さん。どうも突然伺つて、とんだお邪魔をしました。それでは今の件の方はよろしくお願ひして置きます。いつれ近日中に當人を此方へ伺はせますから。」と、云つて、意味ありけに、にやりにやり笑ひながら起つてしまつた。

京子は何故か又ぼつと頬を染めて、

「あら、まあ、お宜しいぢや御座いませんか。」と、云つて、引止めたが、それでも白峯はすたすた階下へ下りていつてしまつた。

京子は仕方がなしに立關まで送つて出たが、白峯はそこで外套を着ながら、又になやりと笑

つて、

「どうか笹山さんによろしく。」と、云つて、歸つていつてしまつた。

京子はその一言で何かしらひどく厭な氣がした。

又二階へ歸つて來てみると、笹山は跣座をかいて、煙草ばかり吸つてゐたが、たつた二人ぎりになつたので、急に打解けた態度になつて、

「横川さん、白峯さんは何の用で來たんです？」と、これにもやりとしながらいふ。その眼にはそれでも何がなしに嫉妬らしい色も浮んでゐた。

京子はさあならぬ顔で、

「い、え、今日は何んですか私に書畫屋を紹介して下さるとか仰有つて、態々被來つて下さいましたんですよ。」と、いふ。そして、彼女は傍を向いて、又熱い茶を入れ出した。

笹山はその様をじろじいみながら、

「書畫屋を？へえ、そりや結構だ。一體何處の書畫屋なんです。」

京子は笹山に茶をすゝめて、

『さあ、處は何方だか知りませんが、何んでも倉橋とかいふ家で御座いましたわ。』と、いつて、眼の前に置いてある先刻の金の入つた封筒をみながら、『ねえ、貴方、あの何んですか、私、その倉橋とかいふ人から澤山のお金を貰つたんですが、そんなものを貰つて置いてもいゝんで御座いませうか。』と、まだ不安さうに訊く。

笹山はその封筒を遠慮もなく取上げてみながら、

『一體幾ら寄越したんです？』と、いふ。

京子は少時考へて、

『何でもその中に五百圓とか入つてるさうで御座いますわ。』

『五百圓？ ふむ……』と、云つて、笹山は笑つてゐるが、やがて、『横川さん、貴女今たつた五百圓ばかりの金で身を賣つちや可けませんよ。せめて二三千圓も持つて來たんなら黙つて受取つて置いて構はんですが、これつばかりの金で何うなるもんですか。それに第一媒

人の白峯さんが可けない。倉橋といふのは私もよく知つてゐる男だから、私からさう云つて上げませう。だからこのお金はなるべく白峯さんの感情を害しないやうな方法で先方へ一應返す必要がありますなあ。』と、いふ。

京子はさう云はれると返事に困つてしまつた。

笹山はその顔をみて、

『いや、横川さん。いづれ二三日中に私がうまく裁いて上げますよ。直接貴女からぢややり憎からうから、私が倉橋を呼んでうまく渡りをつけて上げますよ。』と、云つて、急に語調をかへながら、『横川さん、それよりも今日は重大な要件があつて來たんですよ。實は例の土屋伯爵の方の件ですなあ。あれが非常にうまく行つたんで、今日一寸御報告に來たんですよ。』と、いふ。

京子はそれを聞くと、眼を輝かして、

『まあ、いろいろどうも有難う御座います。』と、いつたが、笹山も又ここにこして、

「いや、實は一昨晚ホテルで伯爵にお眼にかつたもんですから、あのお話をする、伯爵も非常によろこばれて、それなら二十九日の晩には是非横川京子を邸へ連れて来て呉れと云はれるんです。二十九日といへばもう明後日だが、貴女の方の都合は何うです？」と、自分もいそいそして云ふ。

京子は嬉れしさに思はず涙ぐんで、

「私、ちつとも差支へは御座いませぬわ。ほんとに何から何まで御厄介になりました。…」と、云つたが、笹山はそれなり熱い茶をぐつと飲んで、

「いや、それならそれに極めて早速伯爵の方へ御返事をしませう。ほんとにうまい工合でしたなあ。」と、云つて、又京子と顔を見合はせて笑つた。

三十七

待ちに待つた二十九日はいよいよやつて来た。京子は何うしたものか、土屋伯爵に逢ふのが非常に嬉れしくて、何にかしら伯爵に逢つたら自分の地位なり、名聲なりがもつともつと強固になるやうな氣がしてならなかつた。政治界でもあれほどの勢力を持つてゐる人ではあるし、それに藝術の鑑賞にかけても非常に優秀な眼をもつてゐる伯爵のことであるから、きつと將來も自分を援けて、自分の頼りになつて呉れるに相違ない。それに又さうした高貴な人々の知遇を得るといふことが、どんなに義父の峯村や、實母のらく子に對して自分の名聲を誇る道になるであらうかといふことを考へると、彼女は女らしい復讐の感じと、虛榮心と同時に満足させることが出来たのであつた。

さうした立派な伯爵邸の賓客になるのかと思ふと、京子は先づ何よりも身装のことから考へてか、らなければならなかつた。質屋の倉にもお召の一枚や二枚は入つてゐるが、併しそれももう着古したものなので、とてもそんなものを引懸けてはいけなかつた。で、京子は階下の細君にも相談して、その傳手で色物の模様を高い損料を出して借りて貰つた。幸ひ術丈

けも合ふので、彼女は自分で襦袢の襟などはいろいろに工夫をして、やつと一通りの支度だけとはと、のへたのであつた。その費用は皆書畫屋の倉橋から貰つた五百圓のなか、ら出したのであつた。

その日になると、京子は午のうちに銭湯へいつてすつかり温まつてきて、それから自分の居間で二時間もかゝつて化粧をした。そして階下の細君にも手傳つて貰つて、衣裳を着たが、午後の六時に笹山が迎ひに来て呉れた頃にはやつと身支度も出来上つて、京子は階下の細君の鏡臺の前へ坐つて、さも楽しさうに喋いでゐた。

笹山もその日は珍らしくフロックコートを着て、見違へるやうな立派な紳士になつてゐた。彼は電燈を引きそばめて、髪を直してゐる京子の姿をみると、ほんとうに驚いたやうに、

「やあ、こりや綺麗に支度が出来ましたなあ。まるでお嫁さんのやうだ。實にいゝですよ。その風装でひよつくり往來なんかで逢つたら、それこそ見違へてしまひますなあ。」と、云つて、座敷の入口のところへ立つたまゝ、うつとりと彼女の姿に見入つた。

京子は恥かしさうに嬌態をして、

「あら、まあ、被來いまし。」と、云つて、慌て、櫛を置きながら、「そんなに御覽になつちや厭ですわ。私何んですか、こんな濃い化粧をしたことがないもんですから、まるでお芝居でもしてゐるやうで變なんですの。ほゝゝゝゝゝ。」

笹山はやつとそこへ宙腰になつて、洋袴へ皺がつくのを恐れるやうに、片膝だけ落とすしながら、

「いや、かうしてみると、貴女は全く美人ですなあ。これぢやいろんな人が誘惑しようとするのも無理はないですよ。はゝゝゝゝ。」と、事もなげに笑つて、「併し大變にいゝ着物が出来たぢやないですか。いつこんなのをこしらへたんです？ 怪しいねえ。」と、戯れにいふ。

京子はぼつと頬を染めて、

「ほゝゝゝゝゝゝ。いゝ模様でございませう。これにはいろいろ譯があるんで御座いますわ。苦心慘憺の結果なんですもの。ほゝゝゝゝゝゝ。」

笹山も大方それと察して、

「や、それぢや何處か、ら借りましたな。は、は、は、は。うまいことをやつたもんだ。どうして袴丈がきちんとあつてゐるうへに、貴女のお人柄がお人柄だから、一分の透きもないですよ。實にかうやつてみると御綺麗なものだ。は、は、は、は。」

京子は一寸此方へ凄艶な眼をみせて、

「あら、そんなにお冷評しになつちや、私厭で御座いますわ。それでなくても氣がさして、ひやひやしてゐるんで御座いますもの。」と、甘えるやうにいふ。さういふ彼女の姿には、今迄嘗つて見なかつた豊麗さと、艶めかしさがあつた。彼女はまた結婚しない前の處女のやうであつた。

笹山は非常な機嫌で、いろいろなことを云つては京子に擲擲つてゐたが、やがて、

「さ、支度が出来たら、もうそろそろ時間ですから、出掛けようぢやないですか。今日は雨になりさうだから、自動車を廻させたのですよ。それにいくら平民でもあの伯爵の大門を歩

いちや通れんですからなあ。は、は、は、は。」

京子はやつと鬢をなほして、すらりと繪のやうな様子で立ちながら、

「まあ、自動車を？ ほんとに何から何迄有難う御座いますよ、ねえ。ぢやお伴を致しませう。」と、云つて、もう一度立つた姿を鏡に映してみる。

二人はやがてそのまゝ、階下へ下りていつて、階下の細君に送られながら門口へ出た。そこには大型の自動車が池島の家のお關よりも大きな圖體を横たへてゐた。

「それぢや行つて被往いませ。京子さん、さうして被居ると、どうしたつて太神宮へ被往る方みたやうですわねえ。」と、さも羨ましさうに冷評する細君の琴子の聲をあとに聞きすて、自動車を眞直に本郷通の方へ走り出した。

京子は道々往來の人に顔を見られるやうな氣がして恥かしさにそつと顔を伏せてゐたが、笹山はさも得意さうに、

「ねえ、京子さん、かうしてゐるところを、峰村さんや、貴女のお母さんに見せて遣り度い

ですなあ。これで行先が土屋伯爵の邸なんだから猶ほ愉快ぢやないですか。」と、いふ。京子はさう云はれると、眼を濕ませて、自分の成功に酔ひ度いやうな興奮を覚えながら、「ほんとにねえ。私がかうなりましたのも皆貴方のお力ですわ。私、何んて御禮を申上げてい、か分りませんわ。」と、口の中で云つた。

笹山はボタツトから葉巻を取り出して、それへ火を點けながら、向う窓の硝子に映る美しい京子の顔を眼も離さずにじいつとみてゐた。

土屋伯爵の邸宅は赤坂の福吉町にあつた。高い石塀で取圍まれた堂々とした建物で、庭園はさして廣さうでもなかつたが、併し二階建ての近代式な洋館が近隣を壓するやうに高臺の端れに巍然として聳えたつてゐた。自動車がその大きな鐵門を入つて、玉川砂利を敷きつめた廣い馬車廻はしを廻る時には、京子は唯もう胸ばかりわくわくさせてゐた。

自動車が洋風の太閤へ横着けになると、笹山は先づ様子振つた態度で先へ車を下りて、西洋式に京子を扶け下ろして、そのまゝ、玄關へ入つていつた。そこにはもう金モールのつい

た制服を着た可愛らしい下童が出迎ひに出てゐて、丁寧に辭儀をしながら名刺受けの銀盆を出す。

笹山は自分の名刺を出して、それへ載せながら、

「あの、今日は横川京子も同道でお邪魔に出来ましたからと、どうか伯爵にお傳へ下さい。」と、去ひ添へる。

下童は奥へ入つていくと間もなく又出て来て、

「どうぞ此方へ。」と、云つて、先に立つて、紅い絨氈を敷きつめた廊下の方へ二人を案内してゆく。

二人が通されたのは、すばらしい裝飾を施した應接室だつた。そこにはもう玻璃の瓔珞の下つた二つの飾電燈が明るい光を隅々まで投げてゐて、眼を眩するやうな金色の家具が燦爛と輝いてゐた。京子は餘りの贅澤さに、少時の間はぼうつとして、何ひとつ厭めることが出来ないうやうな心持ちになつてしまつた。

笹山は物馴れた調子で、にこにこしながら、

「さあ、京子さん、その椅子を頂いたらどうです。貴女伯爵邸へ来たからと云つて、そんなに堅くなつちや駄目です。」と、云つて、自分も程よいところの椅子へ腰を下ろしながら、その隣りの椅子を京子にすゝめる。京子もそつとそれへ腰を下ろした。立つてゐると、妙に腰のあたりがむづむづするやうなので、彼女は自分では知らずに腰を下ろしてしまつたのであつた。

そこへ美しい小間使達が入れ換り立ち換り茶道具や菓子などを運んで来た。

三十八

やがて少時経つと、小間使達の出入りする扉とは別な方の扉ががたりと開いて、そこからまだ年の程三十三四ともみえる、色の白い小肥りのした美しい紳士が、粹な燕尾服を着て、

満面にやさしい微笑を湛へながら、身軽に入つて来た。それが有名なあの土屋伯爵であつた。伯爵はつかつかと笹山の傍へ歩み寄つて来て、慌て、椅子から立ち上る彼を手で抑へながら、

「やあ、笹山君、ようこそ。」と、軽く挨拶をして、京子の方をみながら、「やあ、此方が横川京子さんですか。初めて。私が土屋です。」と、いかにも捌けた態度で自分を紹介する。

京子は椅子から立つて、何うしていゝかといふやうにもぢもぢしてゐたので、却つて面喰つてしまつた。

笹山はもう別に京子を伯爵に紹介する必要もなくなつてしまつたので、笑ひながら、

「何うも先夜はホテルで誠に失禮を申上げました。あの時のお言葉に甘えまして、今夜は横川さんを同道いたしましたして、お邪魔に伺ひましたやうな次第で。」と、云つて、丁寧に挨拶する。

伯爵は椅子へは就かずに、葉巻をくゆらしながら、美しい京子の姿をみて、洒脱な調子で、

すと若い閨秀畫家で御座いますから、皆が擔がうといたしますのでなあ。は、は、は、は。」
 「いや、さうだらうとも。い、意味でも、悪い意味でも、追隨者、憧憬者がさぞ多いであらうからなあ。は、は、は、は。しかし、横川さんなどはあれほどの技倆を持つて居るのだから、もうそんなものには少しも媚びる必要はないですよ。唯一途に藝術の神に奉仕して居ればそれでいゝのだ。なまじ人氣なぞに戀戀として、右顧左眄しだしたらそれこそ生命はなくなつてしまふ。どうかそれだけは私の忠言として、いつまでも胸の底に刻んで置いて下さい。」と、いふ。

京子はさうした親切な言葉が嬉れしくて、感激の涙がいつかしたら彼女の眼を濕ませてしまつたのであつた。

伯爵はそれから京子の生ひ立ちや、師匠の田原翠嶺との間の關係などを詳しく訊ねた。京子もさうなると、つゝまじやかな調子で、伯爵の問ひに一つ自分が答へた。伯爵はさも興味が深いやうに、じいつと京子の姿を見てゐたが、すつかり訊いてしまふと、ゆつたり笑つて、

「いや、貴女のお父さんの横川蓼坡さんは私もよく知つて居る。あの人は實は私の伯父が非常に好きで、今でもあの人の描かれたものは澤山所藏して居るのですよ。實に藝術の士としては、清廉潔白で、得難い人物であつた。今生きて居られれば、一方の頭目として随分活動もして居られたであらうが、全く惜しいことをしたですなあ。私の邸にもお父さんの描かれた花鳥の屏風が一双あるので、實は今夜態々出させて、食堂の方へ飾つて置きましたからあとでみて下さい。」

さう云はれると、京子も亡き父のことを思ひ出さずにはゐられなかつた。父さへ生きてゐて呉れればと思ふと、先立つものは涙であつた。彼女はやつと溢れ出てくる涙を押隠しながら、

「あの、私も、この道の才と申すほどのものも恵まれては居りません癖に自分で思ひ立ちまして、父と同じ道に志しましたからは、何んとか致して父の名を辱かしのめないやうに致し度いと存じまして、此れから後も一生懸命に勉強を致す決心で居りますので御座いますから、

どうかこんな不束なものでは御座いますが、いろいろと又御指導も仰ぎ度う御座いますし、また御後援も願はなかりやならないと存じまして、……」

伯爵はそれを皆まで云はさずに、

「いや、それは貴女が云はれるまでもないですよ。私も大したことは出来ませんが、自分でも好きな道ですから、又何かとお力にもなりませんし、御相談にも乗りませう。唯どうか今のその覺悟を永久に忘れんやうにして貰ひ度いですなあ。どうも名聲といふものは人の心を緩ませていかんもんですからなあ。」

さう云つてゐるところへ、小間使が食堂の用意の出来たことを報らせて来た。と、伯爵は又身輕に立ち上つて、

「や、それぢや彼方の支度が出来たさうですから、御案内ませう。その前に私は一寸衣物を着換へて來ますから、どうか彼方で少時お待ち下さい。實は今日午後の四時から佛蘭西大使館で大使の新任披露があつたもんですから、こんな大業な風装をして居るのですよ。それ

ぢや却つて堅ツ苦しくてゆつくりお話しも出来んですから、失禮ですが一寸着換へて來ます。」と、いつて、笑ひながら伯爵は扉を出ていつた。

笹山と京子はやがて小間使に案内されて、美しい食堂へ入つていつた。

三十九

食堂の後の壁には成るほど伯爵の云つたやうに、京子の父の墓坡が描いた見事な花鳥の屏風がたて廻してあつた。仕立てがすばらしい出来なので、極彩色のその繪が一段と立優つてみえ、煌々たる飾電燈の光に映えてみえるその美しさは、さながら古美術品のやうな光彩を放つてゐるのであつた。

笹山も驚異の眼を睜つてうつとりと眺めやりながら、

「ほう、こりやすばらしいものですねえ。こりや確か今から十五年ほど前のお作ですなあ。」

私もよくは覚えて居らんが、確か博覽會に出たものですよ。」と、云つて、傍へ寄つて仔細に繪筆のあとを見ながら、「どうも實に結構なものですなあ。もうお父さんも此の時分には運筆の方でも一家を成してゐられたゞけに、何處といつて非の打ちどころはひとつもないぢやありませんか。まづざつとつもつてみて、今の價で三千圓といふところでせうなあ。實に見事なものだ。」と、小聲でいふ。

京子もこれが亡き父の作品かと思ふと、懐かしさは胸一杯に溢れて來た。じいつとみてるうちに、その繪にはたしかに見覚えがあつて、彼女の生れた家の畫室で亡き父がこれを描いてゐた時分のことだと思ひ出されてくる。亡き父はあまり多作の方ではなかつたし、彼女も子供の時から好きな道であつたので、大方の作品には何處かに一箇處でも二箇處でも目星がついてゐた。たしかこれを描いてゐた時分は春の初めで、庭の櫻が眞白に咲いてゐたと思ふと彼女はもう自分でも思ひ出の懐かしさに堪へられなくなつて。

『あの、これは笹山さん、たしかに博覽會へ出したもので御座いますわ。丁度私が八歳位

な時分と覚えて居りますわ。あすこにとまつてゐる小禽を、たしかに覚えて居りますもの。』と、云つて、自分も傍へ寄つて呼ばふやうに畫面を眺めたが、みればみる程父の腕の牙えがはつきりと分つて來る。到底自分なぞの及ぶところではないと思ふと、彼女は今更のやうに自分の未熟さが恥かしくもあり、悲しくもあつた。

そこへ伯爵は大島の平常着に着換へて出て來た。

『やあ、横川さん、その屏風ですよ。お父さんのお作は。』と、いつて、笑ひながら、「どうです、見事なものでせう。貴女、覚えはありませんか。」と、打融けた調子でいふ。

京子は嬌態をして、

『あの、唯今笹山さんとお話しを致して居りましたんで御座いますが、私、これをよく覚えて居りますの。これは何ういふ御方面から此邸様のお手に入りましたんで御座いませう。』と、いふ。

伯爵は笑つて、

「いや、これはやつぱり先刻お話ししに伯父がもう十五六年前に博覽會で手に入れて、私の邸へ譲つて寄越したものだんですよ。今では私の邸の家寶のひとつになつて居るんですが、貴女が今夜みえるといふので、まあお眼にかけたやうな譯なのです。」と、云つて、食卓の椅子を示しながら、「まあ、皆さん、食卓へついて下さい。食事をやりながらゆつくりお話ししようぢやないですか。」と、いふ。

その晩の献立は贅澤を極めたものであつた。伯爵は高價な白葡萄酒を皆にすゝめながら、食卓でも京子の父の蓼波の話を先々としていつた。京子もつひひ引入られて、いろいろ面白い思出話などをしたが、それが殊の外伯爵には氣に入つたらしかつた。

笹山も伯爵の酒の相手をして、彼の話に巧みに合槌を打つては、その席を賑はしてゐた。食事が済むと今度は別な接客室へ座を移して、そこで笹山にはチェリーブレンデーが出た。彼は少し酔つて来て、その酒がうまいと云つては、幾つとなく盃の数を重ねた。

その席で、ふと伯爵の口から東京新報の話が出たので、笹山は興に乗つてゐるやうな調子

で、詳しく黒田の一件を話した。と、伯爵もさすがに眉を擧めて、

「いや、どうもさういふ事情であつてみれば仕方がないが、併し笹山君、さういふ方面のことは一切君が責任をもつて、充分この横川さんの保護をしてあげる必要があると思ふですよ。横川さんは今が一番大事の時なのだから、つまらんことで名聲に傷がつくやうでは實に遺憾だからなあ。」と、いふ。

笹山はもう一人で引受けて、

「いや、どうかもうそのことなら御心配下さらないやうにお願い致します。私も今迄は大したことにもなるまいと思つて放棄つて置きましたが、伯爵のお耳にまで入るやうではそれこそ一大事で御座います。以後はもう決してかういふやうなことのないやうに充分力を盡すつもりで御座いますから、どうか御安心を。」と、いふ。

伯爵はにつこりして、

「いや、どうも何をいうても、横川さんが畫家としてはあんまり綺麗すぎるから兎角の噂が

立つのだ。は、は、は。併しまあどうかあんたも、操行上のことで世間から批難されることのないやうに、それだけはくれぐれも注意して貰ひ度いですなあ。いくら晝が上手でも、そんな風な缺點が露骨にみえると、全くのところお座がさめてしまふからなあ。は、は、は。』

さう云ひながら、伯爵の眼は何か意味ありけにじいつと京子の方をみてゐた。

京子は顔から火が出るやうな思ひをした。

つひ話の面白さにひかされて、笹山も京子も午後の十時過ぎまで伯爵邸で話し込んでしまつたが、それと氣付くと笹山はやつと立ち支度をした。京子もそはそはしてその晩の手厚い饗應の禮を述べたが、伯爵も椅子から立つて、

『いや、もうお歸りですか。どうも何もお構ひが出来なくて、残念でした。』と、云つて、京子の傍へ寄つて來ながら、『あの、横川さん、もうこれで貴女ともお馴染みになつたのだから、これからはどうか暇があつたら又ちよくちよく邸へ遊びに來て下さい。前に電話さへかけて下されば、いつでも私は邸でお待ちするから。』と、いふ。

京子は厚く禮をいつて、笹山のあとから接客室を出た。その時、伯爵の吸つてゐた葉巻の匂ひがどうしても彼女には忘れられなかつた。

笹山の乗つて來た自動車は又九時半に迎ひに來るやうにと命じて置いたので、もうその時分にはちやんと支度をととのへて女關先へ來て待つてゐた。その自動車に乗つて伯爵邸の門を出る時には、京子はもう嬉れしくて、酔つたやうになつてゐた。

往來へ出ると、いつから降り出したのか、外は激しい雨になつてゐた。笹山は車窓から外を覗いてみながら、

『いや、こりやひどい降りですなあ。』と、云つたが、彼は酔つた顔に何にかしら不思議な表情をみせながら、『ねえ、京子さん。私はこのまゝ家へ歸つてしまふのは、何んだか寂しくて耐らんですなあ。まだもう一時間位は大丈夫だから、何處かへいつて、もう少し今夜の話をしようぢやないですか。』と、いふ。

京子も笹山の寂しい境遇を思ふと、いぢらしくなつて、

「え、私構ひませんわ。貴方さへおよろしければ何處へでもおつきあひしますわ。ほんとに今迄あんなお立派なお邸にゐて、このまゝ別れわかれになつてしまふのは寂しう御座いますねえ。」さういふ彼女も寂しさうであつた。

笹山はやがて運轉臺の方へ顔を出して、運轉手に何事か命じた。そしてもとの座席へ腰を下ろしながら、急に浮々した調子になつて、

「併し今夜はほんとに大成功でしたなあ。伯爵はあの通りお忙がしい體なのに、よくあれほど歓迎して下さい下さつたぢやありませんか。それといふのも皆横川さん、あなたの美貌と名聲のおかげですよ。私は感謝します。はゝゝゝゝゝゝ。」と、冗談のやうにいふ。

京子は眞紅になつて、

「あら、貴方、そんなことを仰有つちや私厭で御座いますわ。私なんかよりも、貴方に對して御信任が深いから、今夜のやうな御待遇を受けたんで御座いますわ。」と、いつて、うつとり空を瞻めながら、「でもほんとに伯爵はおやさしい、お方で被居いますわねえ。私も

つと貴族ぶつた、恐い方かと思つてゐましたら、それこそ大違ひで御座いましたわ。ほんとにあんな方にお馴染みになれて、私こんな嬉れしいことは御座いませんわ。」と、いふ。

笹山は笑つて、

「それに貴女、伯爵はあの「元祿の夢」を定價どほりに買つて下さらうといふんですもの。こんな結構な相手はありませんよ。まあ、失策しないやうに大事にすることですなあ。」といつた。

自動車は篠つく雨を冒して、眞暗な屋敷町を何處へともなく疾驅していつた。京子はこれから自分が何處へ連れていかれるのか、そんなことはまるで氣にもかけてゐなかつた。

四十

京子はそれから、熱に浮かされたやうな調子で、笹山と土屋伯爵邸で起つた出來事の話

を先々としてゐるが、そのうちにふつと氣づく、自動車はいつの間にか、何處とも知れぬ賑やかな大通りへ出て、そこからほの暗い怪しげな横丁へ入つていつた。そして角から七八軒もいつたところにある一軒の門構のある家の前でびたりと停つた。

笹山はそれをみると、ふつりと話を止めて、運轉手が扉を開けるのを待つて、

「あの、お前氣の毒だが、どうか中へいつて笹山だといつて、傘を一本借りて来て呉れないか。」と、いふ。戸外はまだひどい降りで、扉を開けると一緒にざあツと吹つかける音が聞えて来た。

運轉手はやがて中から雨傘を借りて来て、それを扉のところへさしかけた。とみると、その傘には大きな字で「菊の家」と、かいてあつた。

笹山はにつこりして、

「さ、横川さん、此處へ上つて一寸一杯やつていきませう。さ、下りて下さい。」と、いふ。京子は何の氣もなしに、ついと起ち上つて、

「それではお先に。」と云つて車を下りたが、笹山も續いて降りて来て、そのまゝ二人は相合傘をしながら門の中へ入つてゆく。

その正面には粹な格子戸のはまつた入口があつて、その傍には鐵製の春日燈籠が降る雨の中にしよんぼり濡れてゐる。京子はどうみても一度来たことのあるやうな家なので、笹山のさしかけて呉れる傘の下で、

「ねえ、笹山さん、此處は何處なんで御座いますの。」と、訊いてみた。

と、笹山は氣味悪く笑つて、

「こゝですか。此處はさういつぞや貴女と来たところですよ。私の家内が亡つてからすぐあとでしたなあ。」と、云ひながら、つかつか格子戸を開けて中へ入つてゆく。京子も酒で氣が大きくなつてゐるので、別に何んとも思はずにそのあとからついていつた。

上櫃のところには丸鬚を結つた中年の女中らしいのが立つてゐて、

「まあ、旦那、ようこそ。この降りによくお出懸けでしたわねえ。まあ、どうぞ。」と、下へも置かないやうに云つて、笹山と京子を奥まつた座敷の方へ案内してゆく。

通されたところは四疊半の茶風な座敷で、汚れてはゐるが併し一寸氣の利いた取廻はしであつた。

笹山は女中が敷く座蒲團のうへへどつかと坐つて、いかにも馴染みらしい調子で、

「おい、お政さん、何よりも早く酒を呉れないか。それから何か一寸撮みものもあつらへてな。」と、いふ。

女中は坐つて、小婢が運んでくる絞手拭や火鉢をよさうな處へ置いて、

「まあ、何んですねえ、せつかちな。ほムムム。夜が長うござんすから、まあ、御悠りなさいませよ。」と、云つて、座敷の入口のところへしよんぼり立つてゐる京子の方を向いて、

「被入いませ。さ、どうぞ此方へ。」

と、悪丁寧な調子でいふ。

京子も仕方がなしに、少してれたやうな顔をして、笹山と對向ひに餉臺の向うへ坐つた。

彼女は女中がじろじろ横眼で自分の方をみてゐるので、態と傍を向いてゐた。

笹山は餉臺のうへへ兩手を突いて、

「おい、お政さん、ほんとに早く酒を呉れないか。今夜はどうしたんだか、馬鹿に酒が飲み度くて耐らんのだよ。はムムム。」

お政はその顔をじろりとみて、

「まあ、旦那、でももういゝ御機嫌のやうぢやござんせんか。そりやねえ、貴方、さうでせうとも。あとでたんと御馳走をして頂きますよ。ほムムム。」

と、大きな聲で笑つて、そのまゝ立つてゆく。

笹山は何んと思つたか、自分もついと立つて、お政のあとを追つて、廊下へ出ながら、

「お政さん、それから一寸お待ち。」と、云つて、そこで何やらひそひそ話をしてゐるが、外ではお政の聲が、

「あら、随分ねえ。旦那いくらかお出しなさいよ。」などと云つてゐるのが、かすかに聞えて

くる。

笹山はやがて又座敷へ歸つて来て、京子の顔をみながら、

「ねえ、京子さん、こんな處へ貴女を連れて来て、ほんとに失禮だが、どうか勘辨して下さい。私、他に一寸いゝ處を思ひつかかなかつたもんだから。」と、云つて、にやりとしながら、
「ねえ、貴女、この前に来たときには、このうへの座敷だつたんだが、貴女覚えてるますか？」と、いふ。

京子はやつと思ひ出して

「え、私覚えてるますわ。もう随分になりますのねえ。」と、云つて、その當時のことをまざまざと思ひ浮べながら、「あの時には、私大變に酔つてしまひまして、ほんとに醜態でしたわねえ。今から考へても、何んだか、恥かしくございますわ。」と、覺めかしく笑ひながらいふ。
笹山はその顔をじいつとみて、

「いや、あの時にあんなに酔はせたのは私が悪かつたんです。家内を亡くしたばかりで、妙

に心持ちが荒んでゐたもんだからつひ貴女まで引入れてしまはうと思つて、随分貴女に飲ませたんですもの。いや、ほんとに慚愧に耐へませんよ。はゝゝゝ。」と、頭を掻きながらいふ。
京子は方々で三味線の音や、浮々した女の笑聲などが聞えるので、それと察してはるながら態と白ばつて、

「ねえ、貴方、あの一體こゝは何をする家なんですの。お料理屋なんですか？」と、訊く。
笹山は笑つて、

「まあ、そんなやうな處ですわ。」と、いふ。
京子は疊みかけて、

「それで、何處いらなんで御座いますの？」と、訊く。

笹山は一寸云ひ遊つてゐたが、やがて、

「此處ですか？ 此處は牛込の神樂坂ですよ。」

と、答へて、もう隠してゐても仕様がなと思つたか、「ねえ、京子さん、此處はほんとう

は待合なんですよ。」と、いふ。

京子は態と呆れたやうに、

「まあ、待合なんですの。厭ですわねえ。」とは云つたが、併し京子には、待合といふものがどういふことをする家であるかはつきり分つてはゐないのであつた。

そこへ先刻のお政が酒の支度をして運んで来た。そして盆ごと餉臺のうへへ置いて、京子の方を向いて、

「ねえ、貴女、お任せ致しますからどうかよろしく。」と、云つて、そのまゝ粹を利かしたやうにすぐに出ていつてしまふ。

京子は却つて變な氣持ちがして、何んだか恥かしかつた。

笹山は自分で盃をとつて、手酌で一杯飲んでそれを京子にさしながら、

「いや、どうもほんとに待合なんかへ貴女を連れて来て、濟みません。併し此處は堅い家ですから、料理屋へあがるのとちつとも違はんのですよ。さ、まあ、京子さん、一杯飲んで下

さい。」と、云つて、到頭彼女に盃を持たせて、酌をしてやる。

京子はこのうへ飲んででは悪いとは思ひながら、何んだかその晩は酒の魅力に打克つことが出来なくつてつひ飲んでしまつた。

笹山はひどく上機嫌になつて、

「いや、どうも實に見事ですなあ。やつぱり貴女は藝坡先生の血をひいてゐるだけに、どうしたつて酒を愛する素質をもつてゐるんですよ。はゝゝゝ。どうです、もう一杯。さうして今度は私に返盃して頂きませう。」と、いつて、又酌をしてやる。

京子はその二杯目の盃を飲んで、そのまゝ一寸ゆすいで笹山に返しながら、

「ねえ、貴方、今の御様子でみますと、貴方はちよくちよく此家へ被入るやうですのねえ。ほんとに可けませんわねえ。」と、いつて、銚子をとつて酌をしてやる。

笹山はなみなみと受けて、

「いや、そんなに度々来やせんですよ。まあ二月に一度位ですなあ、はゝゝゝ。」

「あら、あんなことを仰有つて。お隠しになつても駄目ですわ。今の女中さんの様子で大概分りますわ。ほムムムム。」京子の眼は酒でひどく艶めいてみえた。

笹山は笑つて、

「いや、どうもさう云はれちや一言もないですなあ。はムムム。」と、云つて、一寸眞顔になりながら、「だが併し京子さん、もうかうなつたんですから、私はすっかり泥を吐いてしまひますが、全くのところ自分ぢやかういふ處へ來ちや可けないと百も承知をしてゐながら、一度この味を覺えたものはやつぱりどうしてもこの誘惑には勝てんのですなあ。殊に私のやうに家内を亡くして、寂しいその日その日を送つてゐるものは、何うしたつて月に三四度は遊ばすにはゐられなくなるのですよ。それだけはどうか察して下さい。さうして貴女も大眼にみて呉れなけりやいけませんよ。」と、いふ。

京子は指を弄びながら、

「そりやさうで御座いませうともねえ。殿方は、さうでなくつてもお遊びになる方が多いん

ですものねえ。御無理もありませんわ。」と、云つて、笹山の顔をみながら、「でも貴方、さうかと申して、あんまりお酒なんかお過ぎしになつちやお體の爲めにいけませんわ。そりや少しはお氣が紛れていゝかも知れませんが、度をお過ぎになると何んな御丈夫な方でもあとがいけませんもの。私、もう疾うからそればかり心配してゐるんで御座いますわ。」と、情をみせながらいふ。

笹山はそれを云はれると、急にしんみりした眼色になつてひどく悄氣込んでしまつた。

四十一

笹山は少時すると、又盃をふくみながら、口を切つて、

「いや、京子さん、貴女の仰有ることは私にはよく分つて居るのです。全く私はこんなことをして居つては、自分の心持ちなり、生活なりが荒むのを自分でも絶えず不安に思つて居

るんです。併し私はもう何うすることも出来んのです。家内と子供とを一時に喪つてみると、全く生甲斐がないですからなあ。家内が生きて居る時分には、そんなことは夢にも思はなかつたですが、併しかうなつてみると全く私はしみじみ感じましたよ。意氣地がないことを云ふやうですが、全く私の現在の生活には頼りといふものがないですからなあ。家内や子供のゐた頃には何をするにも張り合ひがあつて、今から考へると、無意識の間にこの人生の慰樂といふものを感じて居つたのです。併し今はもうそんなものは樂にしたくもない。唯その日その日に何等かの刺激を求めて、それで日を暮してゆくより他はないのです。ですから従つて、悪い悪いとは知りつゝもかうした低級な歡樂に没頭してゆくやうになるのですなあ。」と、何か懺悔でもするやうにいふ。

京子はその顔を見て、自分も打沈んだ調子になりながら、

「あの、私にだつてそのお心持ちはようく分りますわ。奥さんやお子さんにお別れになつたことはたしかに貴方のお心に深い創痕になつて残つてゐるに相違ありませんわ。その寂しさ

を紛らかす爲めにお酒を召飲つたりお遊びになつたりするのは決して御無理ぢやないとは思ひますが、でも、それにしてももう少し何か高い意味の慰藉なり、お楽しみなりをお求めになつちや如何かと思ひますわ。お酒や遊びなら誰だつてすることぢや御座いませんか。」と、眞實をみせながらいふ。

笹山は恥かしさうに微笑んで、

「いや、貴女にさう云はれると、全く面目次第もありません、貴女の云はれる通りです。私だつて常にさういふものを求めて居るのですが、併し俗人の悲しさには、どうもこれといふものに打衝からないのですなあ。で、つひやつぱり安價な金で買へる慰めに落ちていくといふことになつてしまふのですなあ。私はそれを考へると、全く貴女方に對してもお恥かしいと思ひますよ。」と、いふ。

京子は、笹山がでつぶりした立派な紳士で、相當の見識もあり、社會的地位も持つてゐる男であるだけに、さうした言葉が氣の毒で耐らなかつた。まだ妻や手を喪つた悲しみを忘

れることが出来なくて、表面には何の苦悶もないやうな顔をしてゐながら、ふつと酒なぞを飲むと本音が出てくるのが實に可哀想でならなかつた。で、彼女は裾模様の草花をせりながら又口を切つて、

「ねえ、貴方、どうせもうかうおなりになつたんですから、いつそのこと誰方かいゝ方をお捜しになつて、その方と結婚を遊ばせばいゝぢや御座いませんか。私それが一番よろしいかと思ひますわ。さうすれば又貴方には昔の生活が歸つて來たんで御座いますもの。」と、思ひ切つて云つてみた。

と、笹山は笑つて、

「いや、横川さん、そんなことは駄目ですよ。私もいろいろ考へて、さうした方がいゝとは思つてゐますが、併し相手がないのです。それに其のことを思ふと、何んだか私はこのうへ妻を迎へては濟まないやうな氣がするんでねえ。」と、いふ。

京子は熱心になつて、

「いゝえ、あなた、そんなことは御座いませんわ。そりやお亡しになつた奥様には多少お氣兼ねもありませうけれど、でもそりやもう仕様がないうちや御座いませんか。ですから、兎に角私はいゝ奥さんをお捜しになるのが、一番いゝと思ひますわ。さうでもなさらなけりや到底私、貴方が現在のやうな生活からお離れになるといふことは出来ないと思ひますわ。」

「いや、その御忠告は有難いですが、併し要するにそれは貴方の空想ですよ。私は自分ではそれほどまでに妻を愛し、子を愛してゐたとも思ひませんが、併し亡なつてみると全くあの二人のものに見換へるやうな女を捜すといふことは實に至難の業ですからなあ。それもせめて貴女のやうな方でも來て下さりや、それこそ理想的ですが、併しそんなことは夢にも思ひ及ばんことですからなあ。」

京子は唇を引歪めて、恥かしさうに顔を染めながら、

「あら、私のやうなものなんか仕様がありませんわ。私にはとても人様の妻になるなんて資格はまるでありませんのですから、何んですけれど、でもこの廣い世間ですもの、私きつと

もつとおさがしになつたらいい方があるだらうと思ひますわ。ほんとに早くさう云ふ方をお見つけになつて、一日も早く御結婚をなすつた方が私はるかにいいと思ひますわ。』

笹山は少時の間口を噤んで返事をしなかつたが、やがて又悲しげな顔で、

「併し京子さん、私は本心を打明けてお話しすると、失禮な話だが、私はほんとにとうから貴女が好きで好きで耐らなかつたんです。いや、好きといふよりも寧ろ一種の戀愛を感じてゐるのかも知れませんか。可笑しなことを云ふやうですが、併し全く私は此頃なんだかさういふ氣がしてならないのです。つまり私としては、何とかして、貴女といふものによつて救はれ度いといふ希望が此頃では日に月に燃えたつてくるのです。」と、いつて、彼は急に熱狂的な、異様な顔になつて手を打振りながら、「いや、かう云つたからといつて、私は決してこんなことを貴女に迫る譯ぢやないんです。唯私の心を打明けてお話しすると、つまり、私は漸次に昔と變つた心持ちになつて自分ながら可笑しいほどひとつのものに没頭するやうになつたんですなあ、その對照が今一度漸次と貴女の方へ移つてゆくのですよ。こりや全く嘘

でも何んでもないんです。」と、いふ。

京子は返事に困つて、黙つて變に笑つてゐるたが、やがて急に話頭を轉じようとして、

「貴方、私に面と向つてそんなことを仰有つちや、私恥かしくなつてしまひますわ。それよりもまあ、もう少し召飲つたら如何ですの。私、お酌を致しますわ。」と、いつて、強ひて艶めかしく笑ひながら酌をしてやる。

笹山もその銚子をとつて、

「いや、私も飲みますから、貴女も何うかもう少し飲んで下さい。今夜は又この天氣で、あの雨の音を聞いてゐると、私は心の底から氣が減入つて來るんですよ。こんな失敬なことを云つて、もし腹が立つたら許して下さい。私はほんとに此頃は氣が弱くなつてしまつてねえ、もう誰か自分の頼りになるやうな人が欲しくて耐らないんです。それだもんだからして、自分の周圍にゐる人に自分の本心をさらけだして話し度くて耐らんです。京子さん。どうか私の心持ちを察して下さい。私はまだかうと斷言することは出来ないが、併し近い將來に私

はきつと貴女と戀ひをするやうになるだらうと思つて、窃かに恐れてゐるんです。」といふ。その眼にはさも思ひ入つたやうな熱意が動いてゐた。

京子は仕方がなしに笑つて、

「まさか、そんなことは御座いせんわ。私のやうなものにそんなことがあつて、何うなるもんで御座いますか。」と、云つて、嬌態をしながら、又盃をとる。

笹山はもう酒ばかり次々と飲みながら、頻りに今の身の寂しさを掻き口説いてゐたが、そのうちに漸次と酔つて来て、しまひに同じことを幾度となく繰返して語るやうになつてしまつた。

京子も下地があるうへに飲んだので、その酔ひは靦面に廻つて来た。その晩は殊に氣持りが浮々してゐたので、酔ひの廻りかたは可笑しい程早かつた。京子はもう頬を眞紅にしてふうふうしながら、

「ねえ、笹山さん、もうそんな悲しいお話をなさるのはおよし遊ばせよ。私、あんまり仰有

ると泣いてしまひますわ。それよりも今夜はもつともつと面白のお話をして、面白くお別れしようぢや御座いせんか。それでないと、こんな處へ来た甲斐が御座いせんわ。」といふ。

それでも笹山はぐつたり首を垂れて、

「いや、私は何んと云はれても、この心持ちを消してしまふことは何うしても出来んのです。まあ、假りに地位を變へて貴女私の心持ちになつて御覽なさい。全くそりや何んとも云へんですよ。」と、云つたかと思ふと、つひほろりとして、雙眼に涙を濡ませながら、「あゝ、私は寂しいなあ。人間の世界のことかもう何から何迄たゞ幻のやうにみえて仕様がな。ほんとに唯空な幻だ。京子さん。私達は何を當てに生きていつたらいゝのでせう。私はそれを考へると、ほんとに自殺でもし度くなるですよ。」と、心の悶えをそのままみせるやうにいふ。

戸外では風が益々吹き募つて雨戸に吹きつける雨の音が物凄く響いて来た。今迄四邊で聞えてゐた三味線の音ももう聞えなくなつて、隣町を通つてゆく自動車の警笛の音までが寂し

く消えていった。

京子はうつとり眼を据ゑてゐるが、やがて彼女も引入れられて、何といふ譯もなくしくしく泣き出してしまつた。

笹山はそのまゝぐつたりと酔ひつぶれていきなり京子の手を握つたが、京子は何うしたのか、それを振り離さうともしなかつた。

その時、何處かで柱時計の音がかすかに十二時を打つた。

四十二

その晩は到頭酒の酔ひと、雨の爲めに笹山と京子は、菊の家へ泊つてしまつた。京子は十二時過ぎるともうぐづくに酔つて、自分が今何をしてゐるかさへ判断することが出来ないほど心が亂れてゐた。

その翌朝ふつと眼を覺ますと、もう日がたけてゐるとみえて、雨戸の間からは朝日の光が縞のやうに射入つて、昨夜の風雨にひきかへ戸外では雀の聲が、すが／＼しく聞えてゐた。京子は長襦袢一枚で寝てゐる自分に氣がつくと一緒に、何んだか取返しをつかないことをしたといふ意識がはつきり頭に上つて何がなしにぞつとしてしまつた。彼女の隣りには笹山が枕に顔を埋めて寝てゐるが、彼ももう先刻から眼を覺ましてゐるとみえて、もぞりと寝返りを打つて、此方をみた。京子は恥かしさに、夜着の襟へ顔を隠して了つた。

その日はそのまゝ別れてしまふ譯にいかなくなつて、二人は朝起きて一風呂つかふと又酒を始めた。京子は明るい日の光の射すなかで、笹山の顔を眞面にみていると、唯一途に氣が咎めてならないので、何うかして遁けて歸らうと思つたがその都度に笹山が涙の出るやうなことを云つては引止めるので、彼女は我れにもなく、何か自分の心以外の目にみえない力に引付けられるやうに、つひ立てなくなつてしまふのであつた。

午過ぎになると、京子はいつかしら一つ二つと重ねていつた盃の數で、つひ又酔ひを覺

えて来た。彼女はもうその頃には何うでもなれといふやうな自棄な心持ちになつてゐた。いかに一度の過誤で失策を演じて、それ位なことで自分の體がこれつきりになつてしまふ氣遣ひはないといふやうな自信も心の底にあるので、彼女はしまひには我から、盃を求めらるやうな氣持ちになつていつた。

笹山もいつもとまるで違つた感傷的な態度になつて、

「ねえ、京子さん。もうかうなつたうへは、どうか昨夜私が云つたやうに、私と結婚をして呉れませんか。」と、同じ言葉を幾度となく繰返してゐた。

京子はさうした涙に打濕つたやうな笹山の様子をみると、もう耐らなくなつて、

「ねえ、笹山さん。私、貴方から頂いた今迄の御恩は決して忘れませんわ。私が今日の地位に上ることが出来たのも、皆貴方のお庇護なんですから、私貴方が心から仰有つて下さるそのお言葉は決して聞き捨てには致しません。」と、云つて、自分も泣きながら、「でも、でも私今の自分の境遇を考へますと、何んだかまだ結婚なんていふことは出来ないやうに思はれて

なりませんのですわ。私の我儘かも知れませんが、私どうかして一生獨身でゐられたらと思ひましてねえ。」と、いふ。

笹山は眞實な心持ちを明らかにその眼に現はしながら、

「いや、貴女のお考へは私にはよく分つてゐるんです。こんなことになつた後で、かういふ要求を貴女に提出するのは、私としてはたしかに卑怯至極です。併し私はそれを敢てしなければならぬ程、貴女を愛して居つたのです。私は昨夜たしかに成心があつて、貴女の意識を奪つてしまふまでに酔はせました。併し私は、私は、今だから本心を白状しますが、もういかなる手段を執つても、たとへ私の半生を擲つても、貴女を自分のものになければならぬほど貴女に戀をして居つたのです。京子さん、私は年甲斐もない話ですが、貴女のためには自分の生命を断たうとまで思つて居るのです。私は今迄實際自分を偽つてまで、その心持ちを隠して來ました。併し、併し、今日に及んで私はもう到底このうへ忍ぶことが出來ないほど思ひ詰めてしまつたのです。京子さん、どうか察して下さい。私の、私の弱い、

意氣地のない心を察して下さい。」と、云つて、彼はもうあとの言葉は出ないやうに、激しく
 歎歎してしまつた。

京子も耐らなくなつて、手帛で顔を掩ひながら、

「笹山さん、ほんとうに有難う御座います。それが貴方の御本心とすれば、私、ほんとに嬉
 れしいんですけれど、でも。」

「いや、京子さん、もう何んにも云つて下さるな。もし貴女が私のやうなものと結婚は出来
 ないと仰有れば、私はその時こそ立派に處決をしまひます。私にはまだ若い心が残つて
 ゐるのです。私はこのうへ卑怯な態度は取り度ありませんから、どうか貴女の本心を遠慮
 なく打明けて下さい。」

笹山はさう云つたあとで、もう二人の間には切つても切れない宿縁が結ばれてゐると同時
 に、將來もし自分のものになつて呉れ、ばもう如何なるものを賭しても、京子に更らに大き
 な幸福と、成功とを保證すると云つて、頻りに掻き口説いた……。

京子もさう云はれてみると、もうそれを拒否するだけ強い心持ちになれなくなつて來た。
 で、彼女は積極的にあゝかうといふのを止めて、こゝ少時の間、熟考の餘地を與へて呉れと
 笹山に頼んだ。

二人はその晩も遅くまで菊の家で飲んでゐたが、さすがに十一時頃になると京子はもうさ
 うした家には居耐れなくなつて、やつとのことで歸り支度をした。

笹山は自動車を呼ばせて、それで本郷の宿まで京子を送つて來たが、別れ際に彼は是非又
 二三日の中にもう一度逢つて呉れといつて、哀願するやうに京子の手を握つた。

京子は自分の居間へ歸つて來ると、もう居ても立つてもゐられないので、そのまま床を敷
 いて倒れるやうに寝てしまつた。と、昨夜からの酒疲れが出て、前後も知らずぐつすり寢入
 つてしまつたが、丁度眞夜半過ぎになつて彼女は何うしたのかふつと眼が覺めた。と、頻り
 に渴を覺えて耐らないので、彼女は悪いとは知りながらこつそり階下へ降りていつて臺所の
 水道の栓をあけて、飲めるだけ冷たい水を飲んだ。それと一緒に酔ひも醒めて今度は自分で

も耐らなくなつたほどはつきりした自意識が彼女の心に歸つて來た。

その物音で階下の細君は眼をさましたとみえて、寢間の方から、

『誰れ？　そこでごとごとやつてゐるのは誰れ？』と、強い語調で詰じるやうに云つた。そして怪しいものとも思つたか、ぱつと電燈を點して、そつと障子をあけて此方を差覗いた。京子はそれをみると、何うしたのか、胸が痛くなるほど悔恨の念が浮んで來て、我れ知らず泣き聲になりながら、

『奥さん、相済みません。相済みません。』と、云つて、そのまゝ、遁けるやうに二階へ歸らうとしたが、その時、細君はそのあとを追つて來て、

『あら、横川さんですの？　ほんとに貴女、あんまりお酒なんぞ召飲つちや可けませんわ。私、そればかり心配してゐますのよ。貴女は今が大事な時なんですから、ほんとにお身持ちをお慎みなさならなけりや、それこそ取返しつかないことになつてしまひますわ。』と、しんみりした聲でいふ。

京子は思はず泣きながら、

『奥さん、相済みません。どうか、どうか堪忍して下さいまし。』と、云ひ捨て、彼女はそのまま自分の居間へ上つて來て、又臥床の中へすぼつと藻線込んでしまつた。そして彼女はもう聲を呑んで泣けるだけ泣いたのであつた。昨夜のことを思ふと、彼女は我が體ながら切つて捨て度いほど淺猿しくなつて、五體を木の葉のやうに打慄はせながら彼女は一時間も二時間も涙のあらん限り泣きつゞけたのであつた。

四十三

京子が笹山と結婚したのは、その翌年の春のことであつた。京子は一度の過誤に顧みて何うかして笹山から離れようと思つたが、併しもうさう思ひついたら、京子はたゞならぬ體になつてゐた。京子は將來のことを思ふと、もう到底遁れぬ宿縁に縛め

られてゐるのを感じて、あらゆる空想を思ひ諦め、遂に笹山と結婚する決心を極めたのであつた。

笹山と結婚してから後の京子にはいろいろな苦悶もあつたが、併し彼女はやつとそれに打ち克つことが出来た。彼女はさうなると一層深刻な人生を味はふことが出来て、却つて仕事の方には勵みがついて来た。彼女がその年の秋に、妊娠の苦しさに責められながらやつと描き上げて帝展へ出品した「草迷宮」といふ大幅の畫は、人氣こそ昔に及ばなかつたが、思想の上から云つても、運筆のうへから云つても、又色彩の力から云つてもすばらしい進境をみせてゐた。京子はそれで審査員の賞讃を博して三等賞に入選することが出来たのであつた。さうなるまでには、笹山の苦心も随分大きなものであつた……。

京子はその「草迷宮」が三千圓といふ金で大阪の富豪の手で賣約になつた翌日に、玉のやうな男の子を分娩した。笹山は嬉びの餘り、輝一といふ名を命けて、もう家の中を躍るやうにして噪ぎ廻つてゐた。

京子は子供を生んで初めて笹山と眞實の夫婦らしい心持ちを持ち合ふことが出来るやうになつた。笹山はそれから啓文社の方でも益々自己の地位を堅めてくる。京子は京子で心の儘に繪筆をとることも出来て、二人の間には日に月に収入も多くなつて、丁度結婚してから三年目には下谷の櫻木町に立派な家さへ建築することが出来るやうになつた。

その時になつて、京子の養父である鐵道省の峯村は突如として收監される身になつたのであつた。と云ふのは、彼がもう五年も前から御用商人と結托して多分の收賄をやつてゐたことが、端なくも暴露して、彼は囹圄の人とならなければならぬやうな忌はしい運命に落ちてしまつたのであつた。それと同時に嘗つては京子を苦しめ、妹の喜美子を苛んだあの久保工學士もその犯罪に關與してゐたので、彼も久留米の任地に於て捕縛されてしまつたのであつた。

その事件の爲めに峯村の家も傷ましい破壊をみて、京子の實母のらく子はもうその日から路頭に迷はなければならぬやうな羽目になつてしまつた。

京子はその顛末を新聞でみて、ひどく驚きはしたものの、今となつては何うすることも出
 來ないので、黙つて成行きをみてゐるより他はなかつた。彼女はその頃には考へも變つてゐ
 て何うかして實母のらく子に改心をさせると同時に、行方の知れなくなつてゐる喜美子の消
 息も探り度いと思つて、何かの手筈があつたら、何うにかしてらく子に逢はうとそればかり
 心に念じてゐた。併し峯村の家が破滅してしまつてからは、その家族のもの達も何うなつて
 しまつたか、まるで行方が知れないので、京子は何の手の下しやうもないのであつた。京子
 はらく子のことよりも、妹の喜美子のことを思ふと、時々涙に一日を暮らしてしまふやう
 なことさへあつた。笹山もその昔事件に關係してゐただけに、いろいろな手段を盡して行方
 を探し求めたが、遂に手がかりさへないのであつた。

峯村が服罪してから二月ばかり経つてからのことであつた。ある小雪の降る晩のこと櫻木
 町の京子の家へは、一人の不思議な客が訪ねて來た。取次ぎの女中が玄關へ出てみると、そ
 こには年の程四十七八の、見る影もない女が、破れた洋傘をさして、吹きつける雪をよけな

がらしよんぼり立つてゐた。その女は底力のない聲で、是非京子に逢はして呉れといふので、
 女中は再三名前を訊ねてみたが併しその女は何うしても名を云はずに唯逢へば分るからとい
 ふ。女中は胡散なものともみてとつて、早速笹山と京子のゐる奥の居間へ入つて來て、その趣
 を傳へたが、それを聞くと、京子は何がなしに不思議な氣がして、兎にも角にも自分で玄關
 へ出てみた。それも正面きつて逢ひに出ては後の祟りが恐ろしいと思つて、京子は玄關の紙
 襖の影からそつと眼だけ出して差覗いてみた。

と、そこに下つた燈籠の影に肩をすばめて立つてゐるのは何うみても實母のらく子らしか
 つた。なるほどその姿になつては、名前を云はないのも無理はないと思つて、京子は足音を
 忍ぶやうにして出ていつてみると、ふつと此方へ振向けた顔は正しく母であつた。

それをみると、京子はもう胸が一杯になつて來て、

「あら、母様、母様ぢやありませんの。」と、云つたが、もう胸が込み上げて來て、何とも云
 へない。

らく子も一眼京子の顔をみると、耐らなくなつたやうに顔を伏せて、

「京子。私です、こんな姿になつて、お前の家へ訪ねて来てほんとに情ないとお思ひかも知れないけれど、私私。實は一寸お前に逢つて頼み度いことがあつてねえ。」さういふ聲も涙に打沈んでゐた。

京子はその一言で母がもう昔とすつかり違つた人柄になつてゐるのが分つて、

「あら、母様。そんなことを仰有らないで、さあ、どうかまあお上り遊ばして下さいまし。そんなところに被居つて、もし風邪でも召すといけませんから。」と、云つて、手を取らんばかりにしながら、上へ招する。

母のらく子はさすがに身を恥ぢて、

「いゝえ、京子、もう私こゝで結構です。」とは云つたが、耐らなくなつてか、やつとのことで洋傘をすぼめてすゝめられるがまゝに上へあがつて来た。

京子は女中達に命じて雑巾をもつて來させるやら、何やらして、漸う母を奥の客間へ案内

していつた。

母親はきちんと取片づけられた間内の立派さに、肩がすぼまるかして、もうおどおどしてゐた。彼女は銘仙のべらべらになつた袷に古い大島の羽織を着て、髪もそゞけ、血色も病人のやうに蒼ざめて、とても二眼とみられないやうな見窄らしい姿に零落れ果てゝゐた。

京子は明るい電燈の光でじいつとその様子を見てゐたが、もう悲しさに口もきけなかつた。母親は小さくなつて坐りながら、

「京子、私は昔あんなことをして置きながら今更、お前に逢へた義理ぢやないけれど、もう私ほんとうに困つてしまつて、……」と、云つて泣い泣いながら、「私はお前のことを新聞でみて、こゝへ家を新築したことも何もよく知てゐました。かうなる前に何うにかして一度お前にも逢つて、昔のこともお詫びをしようと思つてゐただけけれど、私、それが何うしても出来なかつた。お前も多分御存知だらうとは思ふが、峯村のお父さんがあゝなつておしまひなすつたんで、その後はあの家をすつかり疊んで、私は子供達と一緒に峯村の弟のところ

へ厄介になつてゐただけれど、かうなるとやつぱり迷ひが出て、とてもこゝではお話しが出来ないやうな失策をして、たうとう彼處からも追ひ出されてしまふやうな事になつてしまつたのさ。それからもうその日のものにも困るもんだから、昔知つてゐた方達の家を廻り歩いてどうやら二月ばかりは暮らして来たけれど、その間に體を悪くしてしまつてもう何うにも仕様がなくなつたんで、實は今夜お前の家へ一寸来てみたんだけど……」と、云つて、彼女は雪に濡れた袖口を引出して、泣き入つてしまふ。

京子はその話を聞いたゞけでも母親の今の生活が分つて、

「お母さん、ほんとによく訪ねて来て下さいました。私、もう昔のことなんか、何んとも思つてゐませんわ。お母さんは御存知ないでせうけれど、峯村のお父さんのことが新聞に出てからといふもの、私、お母さんがどうなつておしまひなすつたらうと思つて、良人と二人でそりや方々へ手蔓を求めてお母さんのお行方を捜してゐましたんですわ。ほんとにそれでもよく訪ねて被來つて下さいました。あの、今良人にもさう申してまゐりますから、是非お逢

ひになつて下さいまし、良人もどんなに嬉ぶか知れませんが、と、云つて、彼女は自分で立つて隣りの居間へ笹山を迎ひにいつた。

笹山もその聲で自分も立つて来て、らく子の姿をみると、さも驚いたやうに、

「やあ、お母さんでしたか。長いことお眼にかゝりませんでしたか、すっかりお變りになつてしまひましたなあ。」と、云つて、「いや、今のお話は隣にゐてすつかり伺ひました。私も不思議な御縁で京子と結婚しました以上はもうどうか昔のことは夢とお思ひになつて、これからはどうか私共二人のするやうになすつて下さい。決して向後貴女のお爲めに悪いやうには致しませんから、その代りどうかもう昔のことはすつかりお忘れになつて、新らしくお生れ變りになつたお心持で私共の云ふことをお聞きになつて頂き度いのです。」と、誠實な語氣でいつて、さも氣の毒さうに、「それにしてもほんとにお變りになりましたなあ。」と、しみじみいふ。

母のらく子は穴があつたら入り度いやうな激しい悔恨の色を顔中に現はしながら、唯泣い

てゐた。

京子も膝にまつはる輝一を抱き上げながら涙を呑んで、

「ねえ、お母さん、それはさうと喜美子は何うなりました。あれ以来どう手を盡しましたも居處が分りませんので、私、今でもそりや心配いたして居るんで御座いますけれど、ほんとは何うして居りますの？」と、いふ。

それを云はれると、らく子は急に聲を立て、泣き出しながら、

「京子。ほんとに許してお呉れ。私あの子のことを思ふと、ほんとに何うしたら自分の罪が消えるだらうと思つて……」と、云つて、涙に言葉を奪はれながら、「喜美子は丁度今から五年前に亡つてしまつたんです。あれは五年前の何月だつたか、あの子をお前の家から連れ出して、峯村へ連れてくると間もなく、喜美子は、喜美子は、あの奥の土蔵の中で首を縊つて自殺をしてしまつたんです。京子、ほんとにお前やあの子に對しては申譯のないことをしました。私達があの時、あんな無理をしてまで久保の處へ嫁けようと思へなければ、喜美子は

今でもこの世に生きてゐてお前にも逢へたんです。私、あの時のことを思ひ出すと、とてもかうしてのめめと生きてはゐられないんです。京子、ほんとに許してお呉れ。」と、云つて、らく子はそのまま疊のうへへ泣き倒れてしまつた……。

京子は長の年月行方を訊ねわびてゐたいとしい喜美子が、もう五年も前に惨ましい死を遂げたと聞いては、涙も出ないほどの悲しさを覚えすにはゐられなかつた。笹山も深い嘆息を吐いて、

「さうでしたか。あの喜美子さんは自殺をされたのですか。」と、云つたが、彼の眼にも涙が浮んでゐた。

戸外では風に誘はれてさらさらと縁端の雨戸に當る雪の音が、夜の寂しさをいやがうへにも深く深く刻み込んでゆくのであつた。京子は過ぎこしの世の様を思ふと、耐らなくなつて母のらく子と一緒にその夜は泣けるだけ泣いたのであつた。そして涙の隙に、彼女は、
「ねえ、お母さん、かうなつてみて初めて私達はお互に心の底の底まで分つたんです。お母さん

んにも子供の愛といふものが初めてお分りになつたでせう。どうかもうこれからは昔を忘れて、私共と一緒に暮らして下さいまし。私共も出来るだけお母さんの爲に盡しませうし、又母様もどうか御自分のお生みになつた子供の價値といふものを正當に考へて御覽にならなけりや可けません。ねえ、母様、母様」と、いふ。

らく子は泣き伏しになつたまふ。

「京子、京子、私はお亡りになつたお前のお父様に何んとお詫びを云つてい、か分らないと思つて、かうなつてもほんとに死ぬにも死なれないだよ。私はもう何事も罰だと思つて身に犇々と感じてゐるのです。京子、どうか、どうか私を助けてお呉れ。私のこの苦しみを救つてお呉れ。」と、彼女は血を吐くやうな思ひで云つた。

昔は二人の娘を捨て、後の良人の爲めに人間の道をさへ忘れ果ててしまつた母親のらく子にもかうして再び子の愛が立戻つて來たのであつた。人の世の光明が愛の力に依つて初めて完成されるといふ實例として、作者は茲にこの悲痛なる事實を讀者諸賢の前に物語つて

來たのである。京子によつて救はれた母親のらく子の後の生涯はどんなに幸福なものであらうか。背かれたものに救はれる悲痛さは、却つてその幸福を倍加するものでなければならぬ。京子も一度は不倫な母に對して燃ゆるが如き復讐の念を覺えたこともあつた。併し子としての至純な愛に甦へることの出來た京子は最も完全な意味に於ての勝利者であつたことを總ての人々に承認して頂き度いのである。

汚れたる戀の爲めに京子を陥れようとしたあの黒田夢人は今九州で新聞記者をしてゐるといふ噂は聞えてゐるが、杳として消息さへないのである。

京子が長い間宿をしてゐた池島夫婦は今でも相變らず本郷に住んでゐて、昔と少しも變らない堅實な生活をしてゐる。

田原翠嶺も此頃では漸う京子の眞實の心持ちを理解して今度京子が描かうとしてゐる「楊貴妃」の大作には充分の力を藉すとかいふ風説が書壇の話柄となつて傳へられてゐるのであつた。

野
火
終

大正十一年六月二十五日發行

版權所有

奧附
切手

野火奧付

定價全壹圓八十錢

著者 長田幹彦

發行者 東京芝公園九號地 長谷川巳之吉

發行所 東京芝公園九號地 玄文社出版部

振替東京一四一七七

印刷所 共同印刷所

ゆくと春

長田幹彦著

時事新報評。春は近く、短かき生命なけきつゝ百千の花も小禽の歌も今日ぞ寂しく春は逝く。此シヨバンの春の曲を聴く者たれか人生の淡き悲哀を感じざらんや、實に作者近來の傑作たる小説ゆく春一卷も亦此悲哀を描いて入神の技を示せる者、青春の血に燃ゆる若き男女に結ばる不可思議なる運命を如實に描き轉た現實のまゝならぬに落涙悲歎せしむ。而も伊東深水畫伯の挿繪は永へに興味つきす。

菊半截函入美本三百九十頁

定價壹圓貳拾錢

白鳥の歌

長田幹彦著

各地の劇場に上演されて非常な好評を博した名篇で、菊池幽芳氏の「女の生命」以來の傑作と賞讃されてゐる。伯爵輝昭と女優榮子との戀、女優と由井博士との關係。其複雑な三角關係の他に、更に可憐にして薄命な伯爵夫人、そして率直な青年とやさしい乙女の戀、その極りなき波瀾は實に現代社會を如實に描寫してゐる。其筆致と情緒とが非常に能く一致してゐるから讀者をして恍惚たらしめずには置かない。

四六版特製上下二冊 前篇貳圓、後篇貳圓貳拾錢

不知火

長田幹彦著

薄命にして涙脆き若き女性を中心として自由戀愛に酔ひつゝ、彼女の周圍に戀の苦酸を味ふ新しき男女、實母を籠絡して亡父の遺産を横領せんとする叔父、爲めに放蕩に身を持崩せる木綿問屋の嗣子、戀愛神聖の夢は破れて失戀に泣く陸軍中將の息子を配し、淨き戀を捧げて得ず新なる戀人を恩人の爲めに奪はれてさすらひの旅路に病み、逝ける女主人公の半生は作者の靈筆によつて哀れに描かれてゐる。

匹六版美本七百廿六頁

定價貳圓五拾錢

呼子鳥

長田幹彦著

國から國を漂泊して歩く曲藝師の一座に身を賣られた憐れな娘の涙の一生を叙してさすらひの身の悲しさとそれに絡はる熱火のやうな戀を描いたものである。戀に悩み義理に責められてゐるお霜は、今までのこの小説に現はれた女よりも如實に深刻に描出されてゐる。彼女は戀人と契つてから幾何もなく、其の戀人の膝を枕に、二十一歳の春を名残として死んで行く無慮八百枚の雄篇些の弛みもなく悲哀の詩美が盡されてゐる。

三六版函入美本七百廿頁

定價 貳

圓

戀ごころも

長田幹彦著

東西劇壇に異常な革進的氣運を促した大評判の「戀ごころも」劇は
本篇を其まゝ脚色したものであります。舞臺の上で幾萬の士女
の同情を受けた美代子は、本篇に於て猶一層鮮明に自分の悲し
き運命を語つてゐます。

父の罪の陰に泣く若い女性の苦惱や、哀切な可憐なその戀が如
何にも如實に一分の隙もないほど巧みな手法で描かれてゐます

三六版函入美本六百八十四頁

定價貳圓五拾錢

506

197

終